

## 史料紹介

## 『看聞日記』現代語訳（一九）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（二三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（一八） 応永二三年～二八年（一四一六～一二一）  
『米沢史学』三〇～三五号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五五号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四七号（二〇一四～二〇二〇年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二九年（一四二二）一月一日から四月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

## 【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年）

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

（表紙直筆外題）「看聞御記 応永二九年正月より十二月に至る」

（伏見宮貞成数え年五十一歳）

## 日蝕

応永二九年壬寅正月一日、天は晴れて風は静かだ。午前十一時から午後一時まで日蝕である。その時刻には雲は晴れて、日蝕の色がはつきりと見えた。「年の始めの良い兆しがある。日は新たで、めでたい神仏の助けがある。すべての事でとても幸せだ」と予祝した。

朝早く白散<sup>びゃんさん</sup>を飲んだ。三盃の酒で新年を祝った。その後、いつものように強飯を食べた。

東御方・廊御方・亡き兄の後家である上臈・我が妻の二条殿・今参、田向経良参議・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・庭田慶寿丸らが参加して、一献の酒宴をした。

小川禅啓以下村人たち五、六人を庭に呼び入れて対面した。三木善理父子もこの列に加わった。三木は今年になって初めて、この新年の慶賀に参列した。珍しいことである。

朝廷の元日祝宴は日蝕のため、明日に延期となったそう。上皇様がお菓を召し上げる儀式は従来通り行われた。お菓の給仕役は、西園寺実永前右大臣が務めたそう。

二日、晴。昨日と同じようにお祝いをした。長資朝臣が京都へ出かけた。今夜の元日祝宴に警備責任者として参列するのである。

元日祝宴の執行責任者の公卿は正親町三条公雅大納言、次席の責任者は正親町実秀権大納言・清閑寺家俊中納言・武者小路隆光新中納言・勧修寺経興中納言・東坊城長遠参議・中院通淳参議兼近衛中将である。少納言役は高辻長広朝臣、弁官役は広橋宣光、左の警備責任者は飛鳥井雅清朝臣・四条隆夏朝臣・白川雅兼朝臣・冷泉為之朝臣、右の警備責任者は山科教豊朝臣・田向長資朝臣・木造持泰朝臣・九条公興朝臣らである。

上皇様がお菓を召し上げる儀式は前夜と同様であった。

朝廷では天皇陛下への拝礼が終わってから、宴会が始まった。翌日の夜明けに宴会は終わったそう。

三日、晴れていたが、夕方、小雨が降った。昨日と同じように新年のお祝いをした。

朝廷では今夜、清涼殿で殿上人たちの宴会がある。葉室宗豊朝臣・木幡雅藤朝臣・五節舞の歌を歌う田向長資朝臣・坊城俊国・薄以盛・岡崎範景らが参加するそう。

上皇様がお菓を召し上げる儀式は前夜と同様であった。

#### 千秋万歳が来る

四日、晴。千秋万歳せんすまんざいの門付け芸人が来た。いつものように褒美を与えた。長資朝臣が京から帰ってきた。宴会以下、すべて無事に終わったそう。

今夜は琵琶など音楽の演奏を始めた。慶寿丸が琵琶を弾いた。五常楽急を初めて習わせた。

#### 田向経良、正三位に叙される

五日、晴。今夜、朝廷では位階を授ける儀式があった。書記役は二条持基左大臣だそう。田向参議が京へ出かけた。白馬宴会に参列するよう命じられたそう。夕方、帰ってきた。田向経良は正三位に叙されたと報告してきた。めでたいことである。

#### 節分で方違えをする

六日、雪が降った。余寒が厳しい。今夜は節分である。方違えで廊御方の部屋へ行き、一献の酒宴をした。田向参議以下も酒宴に参加した。夜が明けてから、自室へ戻った。

七日、晴。「立春の佳い時節であり、人日を迎えて良い兆しがある。とても幸せだ」と予祝した。いつものように朝早く若菜でお祝いをした。

田向参議が早朝、京へ出かけた。白馬宴会に出仕するそう。

昼、重有・長資朝臣と共に強飯を食べた。

今夜の白馬宴會、執行責任者の公卿は洞院満季大納言、次席の責任者は日野有光大納言・万里小路時房中納言・大炊御門信宗中納言・三条西公保中納言・東坊城長遠参議・田向経良参議・日野西盛光参議兼左大弁である。少納言役は清原宗業真人、弁官役は日野西秀光朝臣。警備責任者、左は橋本実郷朝臣・四条隆夏朝臣・月輪基尹朝臣・西大路隆富・中山有親、右は山科教右朝臣・千種光清朝臣・六条有定朝臣・河鰭実村朝臣だそう。

## 田向経良、白馬節会で宣命使を務める

八日、晴。田向参議が帰ってきた。白馬宴会は今朝の午前九時に終わったそう。田向は宴会で宣命（※）を読む係を務めたそう。宴会には初めて出仕したので、無事務め終えて安堵しましたと言っていた。めでたいことである。

いつものように光台寺の風呂に入った。沐浴が終わってから一献の酒宴があった。田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・阿古丸も連れて行った。住職が挨拶に来た。酒宴三献の時、光台寺の僧玄忠・玄超・光意らを私の御前に呼んで、酒を飲ませた。五献が終わってから、席を立った。丁寧な酒宴を用意してくれて、ありがたかった。夜になって、帰った。

※宣命（せんみょう）：天皇の命令を漢字だけの和文体で記した文書。

十日、晴。寿蔵主が新年の挨拶に来た。酒一樽を持参してきた。惣得庵新庵主の理勝と明元らも酒樽などを持って来た。一献の酒が重なり、酒盛りになった。惣得庵主には新任の祝いとして特別に引き出物を与えた。それは青銅の花瓶と御扇である。夜に入って、また一献の酒宴があった。

十一日、晴。朝早く御香宮・山田宮・権現の三社へ参詣した。田向参議・重有・長資ら朝臣・慶寿丸を連れて行った。しばらくして宮家へ帰った。**京都から松拍が来る**

その後、京都から松囃子が来た。猿楽などの芸能をいつものように披露した。酒樽を与えたら、その場で飲んだ。そうしたら、これまたいつものように乱舞をした。褒美などを与えた。

綾小路信俊前参議・西大路隆富が新年の挨拶に来た。例年のようにそれぞれ一献分の酒を持参してきた。宮家の女性たち・藤原能子典侍局・田向参議・重有朝臣らもそれぞれ一献分の酒を献上した。それらの酒で例年のように終日、酒宴・酒盛りをした。

生島明盛が来て乱舞をした。村人の小川禅啓や行光等も参加した。

一献の間、音楽も奏でた。楽拍子の万歳楽・三台急・太平楽急を演奏した。笛は綾小路前参議、笙は長資朝臣、琵琶は私、太鼓は田向参議だった。朗詠などもした。

## 五条大路に立つ傾城の風流芸

夜に入って、伏見荘の地侍たちによる松囃子の行列がやって来た。彼らは京五条大路に立つ美人の遊女に扮しており、面白かった。酒樽を与えたら、すぐに出ていった。

## 毎年恒例の祝宴

今日の祝宴は毎年恒例のもので、いつもと変わらずたいへん賑やかだった。御前での祝宴が終わってから、廊御方の部屋でまた酒盛りをした。

ところで島田益直が新年の挨拶に来たので、面会した。

十二日、晴。音楽会をした。万歳楽・三台急・甘州・春揚柳・五常楽・太平楽急・鶏徳を演奏した。笛は綾小路前参議、笙は長資朝臣と隆富、琵琶は私、太鼓は田向参議である。

## 西大路隆富の笙

隆富の笙は初心者なので、吹ける楽曲の数が少ない。それで隆富は再三固辞したが、無理やりに吹かせた。しかし合奏するには全く問題のない力量なので、吹かせて良かった。

## 闘茶

夜に闘茶をした。私が主催したのである。懸賞品なども出した。私が一番飲み当てたので、一等の懸賞品を取った。それ以外の品は、くじ引きで参加者が分け合った。面白かった。その後、決まり通り一献の酒宴をして、新年初めての茶会を祝った。参加者は、綾小路・田向の両参議・重有朝臣・長資朝臣・隆富・慶寿丸であった。村人たちは参加しなかった。

## 大雪の雪見酒

十三日、明け方に大雪が降り、六センチから九センチほど積もった。その雪風景はとても趣があった。綾小路・田向の両公卿・重有朝臣・隆富が一献の酒宴を用意してくれた。禪啓を呼んだら、すぐに酒樽を持って来てくれた。数献に及ぶ大酒を飲み、とても面白かった。音楽もあつたし、明盛の乱舞も一興だった。

町経時朝臣が新年の挨拶に来たので対面し、殿上の間で酒を飲ませた。

## 崇光上皇二十五年遠忌

その後、大光明寺へ行つた。綾小路前参議・田向参議・重有朝臣・経時朝臣・長資朝臣・隆富・慶寿丸ら、大勢のお供を連れて行つた。まず仏殿で焼香した。経時は香箱を持ち、隆富は参拝席に布を敷いた。次に先祖の御墓前で焼香した。今日は崇光上皇の二十五年遠忌なので、特別に御仏事があつた。

その後、地蔵殿で長老に会い、いつものようにお茶で接待され、引き出物をもらつた。引き出物は扇・杉原紙十帖であつた。二人の参議と重有朝臣も扇をもらつていた。長老が語られることによると、十一日に御塔頭大通院の建立が始まるそうだ。早速に準備して下さつてありがたいことですと礼を言っておいた。

そして座を立ち、指月庵へ行つた。指月庵から眺める雪景色がとても面白かった。秘かに酒樽を一つ持ち込んで、雪見酒を飲んだ。そして言い捨ての連歌を少々詠んだ。

## 私の第一句

山遠く 雪に霞める 朝日かな

第二句を重有朝臣、第三句を田向参議が付けた。その後の句、経時朝臣は遠慮していたのであろうか、とうとう付けなかった。二・三献飲んでから帰った。その足で経時朝臣と隆富は京へ戻っていった。

夜にまた音楽会をした。双調の春庭楽・鳥急・颯踏入破・賀殿急・酒胡子・武徳楽・陵王破を演奏した。次に右楽の退宿徳・崑崙破急・納曾利などを弾いた。朗詠を綾小路前参議が歌った。長資朝臣も合奏した。

十五日、晴。朝早く御粥を食べた。その後、いつものように強飯で小正月をお祝いした。綾小路・田向の二人の参議らが同席した。

## 伏見荘の松拍

昼に松離子が来た。まず石井村の物真似芸。例年よりも趣向が凝らされていた。次に舟津村の物真似芸。いろいろな物真似があつて、びっくりした。その趣向に感嘆した。とても面白かった。見物人も大勢群れ集まつた。次に山村の木守寺の者たちが来たが、たいした趣向はなかつた。いつものように三毬杖を焼いた。それぞれに酒樽を与えた。夜に音楽会をした。宗明楽・十二拍子の蘇合序・三帖・三帖破急・万秋楽破・白柱・輪台・青海波・千秋楽・朗詠などをした。綾小路前参議・長資朝臣が合奏した。

## 月蝕

今夜の午前三時から午前五時の間に月蝕があつた。

十六日、晴。朝早くから音楽会を開いた。回盃楽・鳥急・颯踏入破・賀殿急・北庭楽・胡飲酒序・胡飲酒破・武徳楽・陵王破と朗詠などをした。音楽会が終わつて、綾小路信俊前参議は京都へ帰つていった。今回、綾小路の指導で六調子を稽古したことがとてもうれしかった。冷泉正永が新年の挨拶に来た。

## 御所侍の内本助六が来る

さて三木善理の代理として御所侍の内本助六がはじめてやつて来た。一献の酒を少し持参してきた。善理の代わりに宮家にお仕えしますということだった。

明後日、石清水八幡宮へ参詣することを思い立った。厄年の男ども



が厄落としにお参りするというので、それに連れだってお忍びで参詣しようと考えた。

ところが田向経良参議がしきりに反対する。それはなぜかというと、身分の高い人も賤しい人も大勢が参詣する時期なので、絶対、私の正体もばれてしまうだろうというのだ。それに宮家の男どもも、私が怪しく変な格好で参詣するのはよろしくないと諫めている。

しかしこの二、三年の間、石清水八幡宮へお参りするというのが、私の念願であった。しかし、なかなかうまく行かず、今の今まで参詣を延期してきたのだ。それに、こういう不信心なことでは、神様がどのようなお怒りになるか、それが恐ろしい。ということ、他から批判を受けることを覚悟の上で、宮家の男どもの意見を受け入れず、社参することに決めた。

私の長男も連れて行くことにした。宮家の侍女や侍臣もほとんどお参りすることとなった。船に乗って出かけるので、一献の酒宴を準備するよう寿蔵主に命じておいた。

田向経良参議が急に京都へ出かけた。踏歌の宴会に出なさいと厳しく命じられたのである。田向は差し障りがあると一度は断ったが、田向の意向を受け入れられなかったので、急に出仕することになったそうだ。

### 足利義持・称光天皇・後小松上皇へ年賀状を書き送る

室町殿へ年賀状を、裏松義資に添え状を書いて、室町殿へお渡し下さいと頼むことにした。この用件を京都へ出かける田向に託した。またいつものように、天皇陛下と上皇様へ年賀状を書き送った。

十七日、晴。明日の神事のため、風呂に入り髪を洗った。椎野寺主が来た。椎野も石清水八幡宮へ参詣なさるそう。椎野がお持ちになったお土産で酒を飲んだ。

田向経良参議が帰ってきた。踏歌宴会は今朝終わった(※)という。

九条満教関白が遅刻したので、今朝明るくなってからようやく宴会は終わったそう。それに久我清通大納言・徳大寺実盛大納言の昇進お礼の儀式もあったので、いよいよ遅れたようだ。

宴会の執行責任者は久我清通大納言、次席の執行責任者は徳大寺実盛大納言・中御門宣輔中納言・武者小路隆光新中納言・田向経良参議・中山定親参議兼近衛中将らだそう。

昨夜、室町殿が上皇御所へ行かれたという。庭の池の御船に乗ったそう。初めての事だったので、上皇様のご指示で乗船中、一献の酒宴があったという。

冷泉正永が来た。明日の石清水八幡宮参詣にお供するそう。

※「終わった」：原文では「始まった」とあるが、前後の関係からみて、誤記であろう。

### 石清水八幡宮へ参詣する

十八日、晴。石清水八幡宮へ参詣する。午前九時に宮家の門を出た。西の舟津から船に乗った。私の長男も連れて行った。まだ四歳で幼少だが、思うところあって参詣させることにした。

椎野・東御方・廊御方・兄の後家である上臈・私の妻の二条殿・田向参議の娘であるあや・今参、田向参議・重有朝臣・長資朝臣・正永・慶寿丸・阿古丸らも同行した。このほか田向参議の妹である玄経・稚児の聖乗と梵祐・寿蔵主・椎野の侍者である覚雲・二人の女官、伏見荘の村人である行光・禅啓以下十数人。以上、私にお供する者は、身分の上・下を含め、総じて百人余りにのぼる。船中で食べるお弁当は寿蔵主と禅啓が用意した。身分の高い者たちの対応を寿蔵主、身分の低い者たちへの対応を禅啓の役とした。

まず船中で一献の酒宴があった。少し言い捨ての和歌を詠んだ。川上からの眺望はとても興味があつた。

## 貞成、乗輿のまま巡礼する

午後一時に社頭へ着いた。まず祓え殿で数珠を繰った。次に男山へ登った。そして順に参拝して廻った。私は輿に乗ったままで、宮々を廻った。変わった服装である上にお忍びの参詣であつたので、輿から降りなかつた。神様に対してこのような無礼を働き、神様がお怒りになることを少なからず恐れた。長男は輿から降りして、廊御方が抱いて廻った。

参拝が一通り終わって、男山から下りた。そして午後五時半に再び船に乗った。淀の内膳津で、船から下りた。ここには薬師堂がある。このお堂でお弁当を食べた。このお弁当は、あらかじめ寿藏主が用意しておいたものである。禅啓がまた一献の酒を進めた。二〃三献終わってから、座を立てて船に乗った。

日は既に暮れようとしていた。船中でまた一献の酒宴をした。午後七時、すべて無事に宮家へ戻った。神様はきつと私の願いを受け入れてくれるであろう。私の願いが叶うのはもちろんのことである。

私は今出川家に寄宿している頃、二〃三回、石清水八幡宮へ参詣している。しかし伏見宮家へ戻ってからは初めての参詣だつた。長年の願いが叶って、うれしい限りである。

聞くところによると、上皇様は今日も御船に乗ったそうだ。侍臣たちが船遊びの準備をしたという。室町殿も上皇御所へ来ていた。

いつものように、朝廷と上皇御所で三毬杖が焼かれたという。

十九日、晴。冷泉正永が帰っていった。大教院隆経僧都が新年の挨拶に来たので、対面して、少し酒を飲ませた。

二十日、晴。用健がいらっしゃって、正月のお祝いを申した。即成院善基が来た。酒樽を一つ持参したので、酒を飲んだ。用健・田向参議・重有・長資ら朝臣・寿藏主・善基・梵祐らが共に飲んだ。

夕方、大光明寺へ行き、焼香した。東御方・廊御方と共に行った。

田向参議らも行った。しばらくして宮家へ帰った。

法安寺住職が新年の挨拶に来て、面白い話をしてくれた。住職は酒の入った筒を一本持ってきた。

二十一日、晴。御湯殿の上で少し酒を飲んだ。田向参議らと共に飲んだ。

## 月次連歌会を始める

二十二日、明け方に雪が降っていたが、晴れた。毎月恒例の連歌会を始めた。今月は私が当番の幹事である。参加者はいつものように、椎野・田向参議・重有朝臣・長資朝臣・善基・行光・禅啓らであつた。まず一献の酒宴を特別に用意した。午後九時に百韻を詠み終わった。

## 塔頭大通院の敷地を整備する

二十三日、晴。大光明寺内に建設する塔頭大通院の敷地を、今日初めて整備した。伏見荘村人の人夫を寺に派遣した。大光明寺から申請があつたので、私から村人に人夫役を命じたのである。

豊原郷秋が来たので、音楽会をした。万歳楽・三台急・甘州・春揚柳・五常楽急・太平楽急・林歌を演奏した。笙は長資朝臣、太鼓は田向参議だつた。音楽会が終わって、郷秋に酒を飲ませた。その後、郷秋は帰っていった。

二十四日、晴。椎野が自分の寺へ帰っていった。特別に引き出物を私に献上してきた。

二十五日、雪が降った。それで田向参議が雪見酒として一献の酒を少々持参してきた。夜に入って、京都市内では大雪になったそうだ。しかし、伏見荘の辺りではたいして雪は積もらなかつた。

長資朝臣が京都へ出かけた。朝廷の小番役を勤めるためである。

## 勧修寺経興、稚児の一件で公武から譴責される

二十六日、晴。長資朝臣が京都から帰ってきて、世間話を語ってくれた。最近、勧修寺経興朝臣が朝廷や室町殿からも譴責されて、自宅謹慎をしているそうだ。事の起こりは稚児をかわいがつたことにあるという。

二十七日、晴。用健がいっしょだった。塔頭大通院を建設する日時を陰陽師に占わせて下さいと、大光明寺長老が申し入れて来られた。長老によると、来月の十五日以前に立柱したいとのことだった。

村人の人夫たちが毎日建設工事に来ている。この調子だと早いうちに竣工するのではと、長老が仰っていたそうだ。

二十八日、雨が降った。塔頭大通院建設の立柱の日時を陰陽師の賀茂在方朝臣に尋ねた。すると、「来月の十五日以前には吉日はありません。今月の三十日にすべきでしょう」と報告してきた。このことを大光明寺長老に伝えさせた。それで、今月三十日に立柱の儀式をするとお決めたくなったそうだ。

祐誉僧都が新年の挨拶に来た。一献の酒を持参して来たので、一緒に酒を飲んだ。ところが雨が降り出してきたので、祐誉は急いで帰っていた。

#### 清水寺参詣から戻った宮家の女性たちを「還り立ち」でもてなす

さて宮家の女性たちの清水寺参詣だが、兄の後家である上臈・私の妻である二条殿・塔頭御寮恵芳・重有朝臣・長資朝臣・女官のめ、が参詣に出かけている。ところが雨が降ってきたので、夕方になって帰ってきた。還り立ち（※）の一献を東御方・廊御方・田向参議が主催した。私も参加した。宮家女房の部屋で一献の酒宴となり、謡が謡われた（※）。雨が降るなか、面白かった。

蔭蔵主がいっしょだった。

※還り立ち（かえりだち）…帰還する者に酒を振る舞ってねぎらうこと。本来は、朝廷に戻った賀茂祭などの使者に天皇が宴を賜ること。

原文では「帰り立ち」とある。

※「謡が謡われた」…原文では「一声に及ぶ」とある。

#### 塔頭大通院の立柱

三十日、晴。今日は塔頭大通院立柱の儀式がある。見物のため、大光明

寺へ行った。東御方・廊御方・二条殿・田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。寺の維那寮で見物した。長老もこの場所と一緒に見物した。大通院を建立する場所は、地蔵殿の西側である。

まず午前七時から基礎を据えた。そして午後三時に柱を立てた。さらに午後七時に棟上をした。立柱の儀式は、絹織物の狩衣を着た大工・灰色の狩衣を着た引頭二人・直垂を着た長一人が決められた作法で執り行った。御馬五頭を大工が口縄を取って引いてきた。馬を引いてくるたびに、いつも二回拝礼をした。私の馬一頭を引いてきた。あとは用健の馬一頭・田向参議の馬一頭・寿蔵主の馬一頭・大光明寺の馬一頭である。

およそ大通院造営の費用は寄付で集めさせた。宮家の男女もそれぞれ寄付をした。相応院弘助法親王・椎野寺主・入江殿・真乗寺殿・東御方・廊御方・藤原能子典侍殿・綾小路信俊前参議・庭田重有朝臣・西大路隆富・祐誉僧都・小川禅啓らがそれぞれ身分の上・下に從って、ある者は馬一頭、ある者は絹織物一疋またはその代金などを進上してきた。外様の家司からは寄付を求めなかった。ただ宮家に日常的に仕えている者たちだけである。私は立柱が終わった時点で帰った。上棟式は見物しなかった。すべての事が無事進行して、めでたいことである。

大光明寺長老が大通院建立を急いで下されたことに関しては、感謝してもしきれない。父・大通院の御本意がたちまちに成就する機会が訪れた。すべては神仏の思し召しであろう。それに建立後は、用健が塔頭大通院の住職となるというので、このことも特にうれしい。

#### 故蔵光庵主休翁和尚十三回忌の観音懺法

ところで、蔵光庵主であった故休翁和尚の十三回忌が明日に迫っている。このところ、その法事の準備を進めていたそうだが、今夜、その一環として観音懺法があるという。この蔵光庵の仏事にお忍びで参

列した。田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。僧たちが群れ集まり、見物の群集も大騒ぎですごい人数である。私たちは僧堂に参列した。午後七時から法会が始まった。懺法衆は二十六人、導師は多宝院主の良西堂、香華を手向ける役は相国寺の僧である能藏主だった。懺法の法会はとても素晴らしかった。午後九時に終わって、宮家へ帰った。ところで蔵光庵からは軽食や茶菓子などいろいろ差し入れがあった。思いがけない芳志である。すぐに参列の面々で味わった。

聞くところによると、上皇御所で本年初の音楽会があったそうだ。

二月一日、晴。「すべての事にめでたい兆しがある。とても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

朝早く大光明寺元住職で、現在は雲居庵主である徳祥和尚がいらっしゃったので、対面した。塔頭大通院建立のことをたいへん喜んでいまずと申されて、お帰りになった。

大光明寺前住職の文鼎和尚もいらっしゃったので、お会いした。どうも蔵光庵に臨済宗の長老達が招かれているようだ。

### 鹿苑院主は塔頭大通院建立の恩人

鹿苑院主も蔵光庵に招かれていらっしゃっているそうだ。それで、田向参議を使者に立てて、蔵光庵に行かせた。塔頭大通院建立のことを室町殿へ取り次いでいただき、このように早速造営の運びとなったことを喜んでおりますと、鹿苑院主に伝えさせた。

大通院建立のことは、鹿苑院主が室町殿へ働きかけてくださり、それで室町殿が強くお命じ下さったのである。すべて鹿苑院主のご恩によるものである。それで田向を使者にして、感謝の言葉を詳しく伝えさせたのである。

昼に用健と蔭蔵主が来た。光照院良寿房もきたので、一献の酒宴となった。そこへ珠侍者が酒樽などを持参してきたので、一献が重なっ

て数献に及んだ。御僧たちのご来臨に加えて、田向宰相以下寿蔵主らも大勢、酒宴に参加した。今日は月の初めなので、特に賑やかとなつてうれしかった。

さてかつては近衛局と呼ばれた、故今出川公行前左大臣の未亡人である禪尼に酒樽などを贈った。とても喜んでいたそうだ。

### 清水寺「還立」に対する「還礼」の酒宴

二日、昼に雪が降り、夜になって深く積もった。廊御方の部屋で一献の酒宴をした。先日、宮家の女性たちが清水寺へ参詣した。その留守番をしていた人々が還立の酒宴で、参詣帰りの彼女たちをもてなした。今回はそのお礼だという。雪が降る中、面白い酒宴だった。田向参議らも参加した。

この一献が終わって、御所でまた酒盛りをした。この酒盛りは蔭蔵主が主催したのである。重有・長資朝臣ら若者達ばかりが参加した。村人の広時や広輔も呼び入れた。尺八を吹いたり、歌や舞で盛り上がった。深夜に及んで乱舞など酔狂の余興が続いた。ひどく酔っ払った。

### 細川義之の死

ところで聞くところによると、細川義之讃岐入道が死去したそうだ。臨済宗の長老達が蔵光庵にいらっしゃる折にこの訃報が伝えられたので、長老達は急いで京都へ帰っていったそうだ。

### 大雪の景色

三日、大雪が降った。雪が積もること、二十一〜二十四センチ。松や竹が雪で折れ伏している。春の雪がこのように積もるのは、近年で覚えがない。興味極まりない風景だった。

退蔵庵へ行き、池の上の積もった雪を見た。次に指月庵へ行った。指月庵からの眺望は、言葉にならないほど素晴らしかった。面々が詠み捨ての和歌を詠んだりした。蔭蔵主・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸らを連れて歩いた。しばらく雪景色を楽しんだ後、帰った。



田向参議は京へ出かけた。

#### 公武共に広橋兼宣を許す

四日、晴。田向参議が帰ってきて、世間話を語った。広橋兼宣大納言はこの一日にお許しが出て、出仕したそう。去年以来自宅謹慎していたところ、朝廷・幕府双方からお許しが出た。広橋は、とても喜んでゐるそう。

#### 公武共に勧修寺経興を叱責する

広橋が謹慎している間、朝廷・幕府双方へあらゆる事柄を勧修寺経興が一手に取り次いでいた。ところが今度は広橋が朝廷・幕府双方から叱責されて、自宅謹慎しているそう。

#### 東舟津あたりで芹摘み

五日、晴。夕方、東舟津あたりに行つて、芹を摘んできた。蔭蔵主・慶寿丸・具侍者を連れて行つた。侍臣は一人も連れて行かなかった。宮家には誰も居ないのだ。帰つてから、芹を味わつた。

#### 乱碁を拾う

六日、雨が降つた。暇なので、乱碁(※)を拾つた。

#### 光明天皇の皇女・長照院が亡くなる

ところで聞いたところによると、長照院殿が今朝、お亡くなりになつたそう。この二三年前は老衰からくる病氣におかされていた。ところが今年の春にご病状が悪化し、ついにお亡くなりになつた。この訃報に少なからず驚き歎いた。

この方は光明天皇の皇女で、法華寺長老の御姉にあたる。伏見宮家のことを他とは異なり、いろいろと心配して下さつた方でもあるので、とても悲しい。昔の事件(※)のことも無念に思つていらつしやつたことであらう。

室町殿のお取り計らいで、長照院殿のご遺産は崇光上皇の皇女である栄寿院殿がご相続になるそう。入江殿には故鹿苑院足利義満殿

の娘や現在の足利義持殿の娘がいらつしやるので、栄寿院殿が相続なさるのは、まずもつてめでたいことである。

※乱碁(らんご)：碁石を指頭につけて拾い取り、その多少により勝負を争う遊戯。

※「昔の事件」：不詳。光明上皇が正平七年(一三五二)に光厳上皇と共に南朝に拉致され、大和国賀名生(奈良県五條市)に軟禁された件をさすか。

八日、晴。午前十一時に京あたりで火事があつたようだ。

聞くところによると、甘露寺兼長前大納言が今日、亡くなつたそう。また岡殿の善覚房が昨日、お亡くなりになつたという。

今夜、即成院の念仏の法会に参列した。蔭蔵主・宮家の女性たち、田向参議らも参列した。念仏仲間、ちよつとした酒宴があつた。

九日、晴。田向経良参議らが熊野に参詣することは、二三年前からの念願であつた。その参詣がすでに決まつて、明日、田向らは精進屋に入つて身を浄めるそう。

それで餞別のため、参詣する人々を呼び入れて、一献の酒宴をした。参詣する人たちは、経良の妻である芝殿・田向参議・長資朝臣・寿蔵主・即成院善基・惣得庵主・惣得庵明元・小川禅啓らである。型通り私の餞別の気持ちを表した。この参加者以外に、伏見荘の村人たちも参詣するそう。

重有朝臣も兼ねてから参詣する仲間に入つていたが、宮仕えが忙しく、この場にいたつて急に参詣を思いとどまつたそう。無念のことだらう。

#### 熊野詣で先達の山伏は薩摩阿闍梨

十日、晴。熊野詣での人々が今夕から精進屋へ入る。御所侍の三木善国の屋敷が精進屋である。熊野山伏の明王院に熊野への案内を頼んだところ、同宿の山伏一人の名前を出して紹介してくれた。その山伏は薩

摩阿闍梨というそうだ。

十二日、明け方から雷が鳴り雨が降っていたが、朝には晴れた。兄・葆光院の祥月命日なので、蔵光庵で型通り法事をした。いつものように身を淨め、お経を読んだ。蔭蔵主が自分のお寺へ帰っていった。

ところで、田向参議が突然、京へ出かけた。来たる二十二日に、豊作祈願のため二十二社へ使者を派遣する行事がある。その一環として、田向参議には賀茂社へ使者として赴くようにとの命令が出されたそうだ。熊野詣でのため既に精進屋へ入っているので、その詳しい事情を上皇様へ（※）説明するために、京都へ出かけた。

今回の熊野詣での件は、すでに正親町三条公雅大納言を通して上皇御所へ申し入れてある。それなのに、二十二日の祈年祭奉幣使に田向を任命するとは、どういうことなのだろうか。

夕方、田向参議が帰ってきた。正親町三条大納言を通して詳しく上皇様へ申し入れたところ、「参詣のため精進屋に入っている者を無理やり引き留めたのでは、神様のお怒りも計り知れない。しかたない。今回の奉幣使は免除する」との仰せだったそうだ。

さて長照院殿の御事を綾小路信俊前参議を使者としてお見舞い申し上げた。綾小路は今日、長照院へお見舞いに行つたと連絡してきた。岡殿へも同じくお見舞いを申してきたそうだ。

即成院善基が梅の木を一本献上してきた。この木は東の庭に植えた。

※「上皇様へ」…原文では「公方へ」とある。

#### 宮家で涅槃会を営む

十五日、曇っていたが、夜には雨が降った。涅槃像を懸けた。いつものように涅槃像への捧げ物を宮家の男女が献上した。善基は宮家へ来なかった。

さて熊野詣であるが、明日、出発することが決まっていた。ところが準備が整わないので、十八日に延期となったそうだ。

#### 慈光寺通光が来る

十六日、晴。朝早く御香宮へお参りした。その帰りに、慈光寺通光三位入道とばったり会った。宮家の門前で出会うとは、思いがけないことで、うれしかった。

慈光寺はこの一、二年宮家へ顔を出しておらず、さらに中風に罹（ちかつか）つてからは全く音信も途絶えていた。「余りに寒いと長旅も難しいので、ご無沙汰していました。お久しぶりに参りました」と言っていた。神妙なことである。

#### 菱食の包丁式

慈光寺は、雁の一種である菱食（ひしき）と酒樽一つなどを持参してきた。すぐに重有朝臣が御前で包丁式を行い、菱食を裁いて食べた。

世尊寺行豊朝臣が田向家に来たそうだ。それで宮家に呼び出したら、すぐにやって来た。世尊寺もこの一、二年間疎遠であったが、今春、初めて伏見荘へやって来た。一献が数献の酒宴となった。

その後、私と通光とで囲碁を打った。勝者の賞品は酒である。初番は私の勝ち。二番は通光の勝ち。今度、宮家へ来た時に負けた者の負け態（まがたま）として酒宴をしようと約束した。数時間、私の相手をしてくれた。御扇を慈光寺に与えた。行豊朝臣にも同じく御扇を与えた。夕方になって、二人とも京へ帰っていった。

さて熊野詣での人々が今夕、伏見荘の三つの神社へお参りした。三つの神社とは御香宮・権現・山田宮である。伏見荘から熊野へ参詣する者は京都にある神社へはお参りしないという先例があるそうだ。皆、淨衣（※）を着ていた。

その帰り道、宮家御所に来て、暫し別れの挨拶をしていった。これには参詣する人々が皆、来ていた。それに広時・三木善国・浅野康知、そして女官の目々も参詣の一行に加わっていた。

※淨衣（じょうえ）…灰色の狩衣。神事に着用する。

十七日、晴。精進屋から田向参議・長資朝臣・寿藏主が宮家へ酒一献を持参して来た。暫しのお別れをするためだという。それで酒を飲んだ。禅啓・広時・康友・善国らを私の御前に呼び出し、酒を与えた。そしてすぐに出ていった。

夜になって、秘かに精進屋を覗きに行った。東御方・上臈・重有朝臣・慶寿丸らも連れて行った。良くないことだとは分かっていたが、どのように勤行しているか、知りたかったのである。秘かにお勤めの様子を見たが、素晴らしく真面目な所作であった。

#### 田向経良ら熊野詣でに旅立つ

十八日、晴。午前九時に熊野詣での人々が出発した。船に乗って天王寺まで行ったそうだ。

十九日、雪が降った。即成院主梵基が来た。

二十日、晴。春日祭の警備責任者の西大路隆富が来た。その功績により四位に叙位されたそうだ。

#### 御湯殿の上で梅の花見をする

二十一日、晴。御湯殿の上で酒を飲んだ。東の庭の梅が花盛りである。梅の花見のため、宮家の女性たちがこの酒宴を準備してくれたのである。

二十二日、晴。東山に出て、小松を四〇五本掘ってきて、東の庭に植えた。

#### 西園寺家が滅亡寸前の今出川家の記録を接收する

ところで今出川家の陽明禅尼から手紙が来た。昨日、西園寺家から大勢の使者が来て、今出川家の記録を渡すように言ってきたそうだ。裏松義資を通して上皇様（※）へ申請したところ、問題ないとのことのお返事だったそうだ。それで今出川家の記録を当方へ引き渡してほしいとのことだった。びっくり仰天したが、仕方なく、家の記録を入れた六〇七箱を渡したそうだ。

それで御琵琶関係の文書でお入り用のものがあれば差し上げますので、急ぎお取りに来て下さいと連絡してきた。思いがけないことである。

※「上皇様」：原文では「公方」とある。

#### 今出川家の琵琶関係文書は他家に渡すな

二十三日、小雨が降った。今出川家へ使者を送って、琵琶関係の文書を他家に渡してはいけない、宮家へ預けて下さいと連絡した。秘密の楽譜などが散佚してはならないので、上皇様へも（※）事情を説明して、今出川家に申し入れた次第だ。

冷泉正永が一献の酒を持参して来た。冷泉永基朝臣自身が宮家へご挨拶に行きたかったのだが、上皇御所前庭の池を整備する責任者に任命されたので、急に宮家へ行けなくなったそうだ。それで正永を代わりに寄こしたそうだ。この一献の酒は思いがけないことだった。すぐにその酒を味わった。

#### 興福寺東門院中童子の慶千代

一献酒宴の最中、興福寺東門院に仕える俗官が訪ねてきた。故僧正が召し使っていた中童子の慶千代だった。慶千代はすでに筑前と呼ばれる法師となっていた。

故僧正が上京された折は、寄宿中の今出川家でしばしば見慣れた人であった。旧交を忘れず訪ねてきてくれたのは、神妙なことである。いろいろなお土産も持って来てくれた。すぐに対面して、昔のことをいろいろと話し、酒を飲みあった。

梅の絵二幅・青銅の花瓶一つと香台などを与えた。とても恐れ多いことですと言いながら、すぐに出ていった。旧交を忘れずにいてくれたことをうれしく思った。

※「上皇様へも」：原文では「公方へも」とある。

二十四日、雨が降った。彼岸の初日である。雨の中、暇なので、正永と

囲碁を打った。

二十五日、晴。北野天満宮奉納のための連歌会をした。重有朝臣・正永・行光が連歌会に参加した。人数が少なかったが、百韻まで詠み終えた。二十六日、晴。双六の勝ち抜き戦(※)をした。私・重有朝臣・正永で双六を打った。懸賞品は、私が持っている、ちよつとした小物である(※)。重有朝臣が勝った。

さて先日、梅の花見は宮家の女性たちが準備してくれた。そのお返しとして、御湯殿の上での酒宴を開催した。正永が帰っていった。

#### 今出川家の記録や琵琶関係文書

ところで、今出川家の記録を西園寺家へ渡すのはよろしくないと、上皇様のご命令が出たそう。そのため、琵琶の文書を宮家へお渡しするのも難くなりましたと今出川家の陽明禅尼が連絡してきた。

※「勝ち抜き戦」…原文では「打ち勝ち」とある。

※「懸賞品は、私が持っている、ちよつとした小物である」…原文には「勝負は手裏物」とある。

二十七日、晴。彼岸の中日なので、身を净めた。

二十八日、晴。いつものように風呂に入った。

二十九日、晴。権現山に行き、小松を数十本掘った。重有朝臣と慶寿丸を連れて行った。帰ってから、小松を東の庭に植えた。

ところで、今出川家が領地一〇二ヶ所を支配することに問題はないという上皇様のご命令が出たそう。また同家を相続する人物についても、上皇様がお取り計らいしようという。正親町三条公雅大納言が毎度今出川家のことを上皇様に取り次いでいるので、正親町三条から陽明禅尼へそのような連絡があったそう。うれしいことである。今出川家の継承について、同家に残る男女も少しは安心したかどうか。

#### 東の庭に小島を築き、松を植えた

三月一日、曇っていたが、夕方、小雨が降った。「すべての事がめでたい」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。東の庭に小島を築き、松を数本植えた。

夜に双六の勝ち抜き戦(※)をした。私・宮家の女性たち・重有朝臣が参戦した。妻の二条が優勝した。

※「勝ち抜き戦」…原文では「打ち勝ち」とある。

二日、朝、雨が降った。即成院主梵基が酒樽を一つ持参して来た。これは、宮家の男どもが熊野詣でのため居ないので、留守番をしている私を気遣つてのことだという。

その後、即成院の塔頭を訪ねた。去年の順番で薪を焼く会で、幹事役を勤めていなかったもので、塔頭御寮恵芳と田向経良の妹である玄経に薪を準備させた。これも男どもがいないので、その暇つぶしを兼ねたものでもある。皆から数杯の酒を責め臥せられ、深く酔っ払ってから、席を立った。

#### 桃の節供で闘鶏をする

三日、晴。「桃花の節供で佳い時節である。とても幸せだ」と予祝した。いつものように闘鶏を二〜三番行った。昼には、いつものように御節供のお祝いをした。

その後、梅林庵へ行き、梅の花を遊覧した。次に田向家や庭田家の梅を見て回った。そしてすぐに帰った。

さて今日から毎日琵琶の稽古をすることにした。夏の修行期間に琵琶を弾こうと思う。今日は黄鐘調の桃李花二帖を弾いた。

四日、雨が降った。下野良有・三木善理・禅光らが一献の酒を持参して来た。これは「宮家に男性方がおらず、御暇でしうから、お酒をお持ちしました」ということだった。廊御方のお部屋で一献の酒宴をした。下野たちも参加した。



綾小路信俊前参議も来た。宮家に人がいないので参りましたと言っていた。一献の酒も持参して来た。神妙なことである。音楽などを弾きながら、少し酒盛りをした。

五日、晴。音楽会をした。壺越調の回盃楽・春鶯囀序・颯踏入破・鳥急・賀殿破急・北庭楽・胡飲酒序破・陵王破と朗詠などをした。綾小路前参議が合奏してくれた。

### 食器を壊すのは忌み事

慶寿丸が朝食を相伴している時、食器を打ち壊してしまった(※)。これは縁起が悪いことなので、しばらく自宅謹慎するように命じた。これで、ますます宮家に男手がなくなってしまった。

### 囲碁の負け態として慈光寺通光に宇治川の鯰を贈る

先日、慈光寺通光三位入道が来た時、約束した囲碁の負け態が酒と肴の負担であった。それで、私は負けて肴を負担することになり、宇治川の鯰を慈光寺へ贈った。慈光寺からは丁寧な返事が来て、恐れ入りますと言ってきた。近いうちにまたお邪魔しますとも書いてあった。

さて聞くとところによると、来月、上皇様の御所へ天皇陛下がお出ましになり、三船など(※)が行われるそうだ。

この間、四条隆盛朝臣に対して上皇様からお許しが出たそうだ。四条は去年から自宅謹慎していた。その顛末については、以前、記しておいた(※)。

※「食器を打ち壊してしまった」：原文には「打ち壊しおわりぬ」とあり、打ち壊した対象物は明示されていない。しかし、状況からにて食器であろう。三月六日条を参照のこと。

※「三船など」：未詳。船遊びのことか。大堰川では毎年、平安時代の船遊びを再現した三船祭が行われている。

※「以前、記しておいた」：応永二十八年十月十一日条に四条隆盛が御

厨子所得選(女官)との密通により譴責された件が記されている。

六日、晴れていたが、夜に雨が降った。退蔵庵の梅の花を見た。綾小路前参議・重有朝臣を連れて行つた。近頃では素晴らしい梅の花である。庵主と雑談して、茶を勧められた。しばらくして帰った。

その後、権現山へ行き、小松を掘り、東の庭に植えた。

夜に音楽会をした。慶雲楽・楽拍子の万歳楽・三台破急・五常楽序破急・春揚柳・夜半楽・林歌と朗詠をした。朗詠では、留春々不駐(※)を初めて習った。渡し物(※)は青海波などであった。

### 食器を打ち壊すは、病氣に関する怪異なり

さて昨日の食器を打ち壊したことについて、陰陽師の賀茂在方朝臣に諮問した。それによると病氣に関する怪異だという。打ち壊した人は七日間、自宅謹慎した方がよいとのことだった。それで慶寿丸には七日間の出仕停止を命じた。

※留春々不駐：『和漢朗詠集』春五〇「留春々不住」。

※渡し物(わたしもの)：本来の調子とは別の調子で演奏すること。

※「食器を打ち壊したこと」：原文では「供御を打ち壊す事」とある。

七日、晴。朝早く音楽会をした。双調の春庭楽・鳥急・颯踏入破・賀殿急・楽拍子の春庭楽・北庭楽・胡飲酒破・陵王と朗詠をした。

昼にまた黄鐘調の桃李花二帖・喜春楽序破・河南浦・海青楽・平蛮楽・拾翠楽と朗詠をした。朗詠の春夜欲明(※)を初めて習った。音楽会が終わって、廊御方の部屋で酒を飲んだ。この酒宴は小川有善が用意したものである。この酒宴に綾小路前参議・重有朝臣らが参加した。

夜にまた太食調の打毬楽・朝小子・太平楽・合歡塩・傾盃楽急・輪鼓禪脱・抜頭・長慶子、ついで右楽の古鳥蘇・退宿徳・崑崙破・納曾利を演奏した。また早歌の花と神祇、そして朗詠も歌った。

綾小路前参議が明日京へ戻るので、なんとか六調子すべてを練習したいと思った。それで今日のうちに三調子をやり終えた。疲れを顧み

ず、稽古した。

※春夜欲明：『新撰朗詠集』春夜五八。

八日、晴。朝早く音楽会をした。楽拍子の採桑老・十二拍子の蘇合序・三帖破急・万秋楽序破・輪台・青海波・竹林楽と朗詠二首をした。次に右楽の地久破急・皇仁破急・敷手・新鞆鞆・納曾利・長保楽をした。六調子すべてを稽古し終わる

音楽会が終わって、綾小路前参議は出ていった。このところ宮家に滞在してもらい、六調子すべてを稽古できたので、とてもうれしかった。

世尊寺行豊朝臣が一献の酒を持参して来た。男どもが留守なのでできるだけ早く宮家へ参りたかったが、差しさわりがあつて遅くなつたと言つていた。すぐに酒を飲んだ。この酒宴に重有朝臣・行豊朝臣・具侍者が参加した。

蔭蔵主がいらっしゃつた。しばらくお寺に休暇を申請なさつたそう

#### 熊野参詣者を坂迎する

さて熊野に参詣していた人々が、今日戻ってくる。坂迎え（※）に皆が出かけたそう。坂迎えに出かけた者たちは、綾小路前参議・重有朝臣・珠侍者・寺都寺・有善・善祐・宝泉らだという。ただし綾小路前参議は実際には坂迎えには出かかず、ただ形だけ坂迎えの人数に加わつたようだ。彼らは淀まで坂迎えをしに行つたという。

午後三時に、戻つてきた者たちと無事に出会えたそう。参詣には何の障害もなかったという。めでたいことである。

夜になって、田向参議・長資朝臣・禅啓らが宮家へ来た。熊野での話をしてくれた。無事に参詣できたのは、すべて神様の思召しである。特別に酒を飲ませた。参詣の者たちからお土産をもらった。

#### 楊梅兼英が変死する

後で聞いたことだが、楊梅兼英朝臣が変死したそう。不思議なことである。

※坂迎え（さかむかえ）：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

#### 貝覆いで暇つぶしをする

九日、晴。暇だったので、宮家の女性たちと貝覆いをして遊んだ。一勝を目指した。廊御方が勝つた。それですぐに負け態をした。

#### 和漢連句

私と蔭蔵主で、和漢連句を懷紙一折り分、詠んだ。

十日、晴。いつものように御香宮祭礼の猿楽があつた。本来あるべき通り、楽頭の矢田が猿楽を執行した。

#### 楊梅兼英変死の件、続報

ところで聞いたところによると、楊梅兼英中將が横死した件について、楊梅の敵が誰であるかは不明であるが、ただ夜討ちで刺し殺されたそう。子息の兼興も大怪我をしており、生死の境をさまよつてゐるらしい。

もしかしらば楊梅兼豊朝臣の仕業かもしれない。兄弟仲が悪く、仲違いしていたという。世間の人々は、楊梅兼豊の仕業だと推量しているようだ。

十一日、雨が降つた。この雨で猿楽が延期となつた。私・宮家の女性たち・重有朝臣で、双六の勝ち抜き戦（※）をした。

※「勝ち抜き戦」：原文では「打ち勝ち」とある。

十二日、晴。猿楽が五番演じられた。椎野寺主がいらっしゃつた。椎野のお土産で酒を飲んだ。上巳の祓えを陰陽師の賀茂在方朝臣が献上してきた。

十三日、晴。臨時の猿楽があつた。近年、楽頭は恵波が勤めていた。し

かし、矢田が元のように楽頭職を買い戻した。村人たちから寄付を募って、買い戻し資金を調達したそうだ。

### 雀の小弓

十四日、晴。雀の小弓をした。私・椎野・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸が小弓を射て、勝負した。

用健がいっしょだった。しばらく宮家に滞在なさるそうだ。

夕方、大光明寺の花を見に行った。椎野・蔭蔵主・田向参議・重有朝臣・長資朝臣を連れて行った。今年の花は散々である。古い枝が枯れてしまっていた。見所がなくて、残念だった。

塔頭大通院の建設現場を見てきた。天井が張られ、ほとんど出来上がった状態だった。維那寮で長老と会った。すでに日も暮れたので、帰った。

ところで法安寺の住職が来て、明日、お寺へお出で下さいと招待してくれた。お風呂の用意が整ったそうだ。

### 法安寺の風呂に入る

十五日、雨が降った。終日、大雨だった。法安寺へ行った。私の長男・椎野・蔭蔵主を連れて行った。東御方・廊御方・上臈・二条殿・田向参議・重有朝臣・長資朝臣・稚児の聖乗・梵祐も来た。局女・二人の女官・山田香雲庵真幸しも来た。大勢で押しかけ、寺家が大変であろうと恐縮した。

まず軽食が出た。三献の酒宴が終わってから、風呂に入った。その後また御膳が出された。丁寧なおもてなしが準備されていた。神妙なことである。

### 和漢連句

終日、心静かに過ごしたので、各々が和歌を詠んだ。また和漢連句も懐紙一折り分詠んだ。

雨によし 濡るともかくて 宿借らむ

やがて立つべき 花の影かは 私の詠んだ歌

椎野・蔭蔵主・田向参議・重有朝臣・長資朝臣らも和歌を詠んだ。和漢連句も懐紙一折り分詠んでから、帰った。

私の長男がはじめて法安寺へ参詣したので、お寺が御引き出物を献上してきた。これもまた神妙なことである。

夜にまた連歌を、懐紙一折り分詠んだ。私・蔭蔵主・重有朝臣・長資朝臣らが共に詠んだ。

### 宮家の女性たちを「還り立ち」でもてなす

十六日、晴。宮家の女性たちが大光明寺の花を遊覧しに出かけられた。還り立ちとして酒一樽用意した。私・椎野・蔭蔵主・廊御方・重有朝臣・長資朝臣らが宴を主催した。皆が面白かった。

その後、御香宮に行った。ついで大光明寺の花を一覧した。さらに指月庵へも行った。しばらくして帰った。

そうしたら、前庭の花の下に酒海という大きな酒甕を置いてあり、その酒を飲んだ。今朝のお返しとして、この酒海は宮家の女性たちが用意したものだという。何という早業のお返しであろうか。とても面白かった。花見に彩りを添えた、興味ある計らいであった。

いつものように即成院の念仏に参列した。

十七日、晴。熊野詣での一行に饒<sup>はなむけ</sup>したお返しを参詣した面々がしてくれた。それで一献の酒宴となった。参詣者一同が集まった。

### 和漢連句

前庭の花が盛りなので、これを愛でる花見の宴となった。椎野が絶句の漢詩を詠んだ。それに対して私が和歌で応えた。皆も和歌を詠んだ。椎野がまた酒を補充してくれたので、数献の酒宴に及んだ。

夜に入って、また一献の酒宴をした。

## 春の遊山でゼンマイや小松をとる

十八日、晴。山に出てゼンマイを摘んだ。田向参議・重有・長資ら朝臣を連れて行った。小松四〜五本も掘り取った。この小松は帰ってから、東の庭に埋めた。

ところで宮家に戻ったら、前庭の花の下に酒樽が一つ置いてあった。これは椎野と蔭蔵主が企てたことらしい。趣向がとても面白かったので、すぐに花の下で一献の酒宴をした。男たちも参加して、謡も歌われた(※)。日が既に暮れたので、座を立った。

夜にはまた酒宴があった。これも椎野が企画したものだった。具侍者や稚児の聖乗らも参加した。それ以外はいつもの参加者だった。

※「謡も歌われた」：原文では「一声に及ぶ」とある。

十九日、晴。退蔵庵の稚児である洪得が蔭蔵主に連れられてやって来た。

## 和漢連句

私は昨日の酒宴のお返しを企画した。御所南面の縁側に畳を敷いた。そこに椎野や田向参議らが座った。まず和漢連句を懷紙一折り分詠んだ。田向参議が発句を詠み出した。

散る頃は 八重より深し 花の雪 田向参議

桃紅上苑春

稚児の洪得

夕霞 日影の山に 移ろいて 私句

一折り分詠み終わって、酒盛りをした。広時・広輔も庭に来ていた。歌や舞で楽しかった。燈灯し頃に酒盛りは終わった。

洪得を引き留めて、皆で乱碁を拾うなどして遊んだ。

その後、椎野と蔭蔵主がクジを引いた。椎野には洪得、蔭蔵主には聖乗が当たった。それぞれが二人で今夜、寝所を共にするという。

## 男色は領主の嗜みだが…

私は男色に関して才能がない(※)ので、この奪い合いには参加しなかった。よろしくないことだ。

連日、花見をしてつれづれを慰めた。

※「私は男色に関して才能がない」：原文には「予、非道に才学なし」とある。非道は男色のこと。「よろしくない」の原文は「比興」。ちなみに貞成は女性に関しても妻の庭田幸子のみで、妾をもっていない。

二十日、晴。蔭蔵主が指月庵に移り住むという。夏の修行期間中、指月庵で気ままに過ごすそうだ。大光明寺長老に後燈録(※)の講義をしてほしいと、蔭蔵主はお望みによろだ。

※「後燈録」：未詳。宋代の仏国惟白編『続燈録』三十巻のことか。

二十一日、雨が降った。風呂に入った。その後、私と宮家の女性たちで双六の勝ち抜き戦(※)をした。

※「勝ち抜き戦」：原文では「打ち勝ち」とある。

二十二日、晴。指月庵へ行った。指月庵には蔭蔵主がいらつしやるので、秘かに酒一樽を持って行き、酒を勧めた。ちょうど用健がいらつしやったので、和漢連句を懷紙一折り分することにした。田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸も連句に参加した。

河近し 浪かあらぬか 山桜 私句

維舟柳岸春

用健

夕雲の 霞むと見れば 月出て 田向参議

一折り詠み終わって、帰った。

二十四日、雨が降った。今夜は朝廷で地方官の任命式が開始される。執筆役は二条持基左大臣だそうだ。

用健と蔭蔵主がいらつしやった。雑談をした。先日、指月庵へ行ったことについて、蔭蔵主が詩歌でその趣をまとめたという。その序文を書いてほしいとのことだった。すばらしいことだ。序文は和歌で内容に応じることしよう。

## 椎野が稚児の洪得にひどく迷乱している

ところで、椎野寺主がまた稚児の洪得を呼び出している。この稚児



にひどく血迷っているようだ。十種香で遊んだ後、二人で共寝していた。よろしくないことだ。

熊野詣での坂迎えのお返しとして、精進屋で関係者が会合を開いたようだ。

#### 超願寺へ行く

二十五日、晴。野遊びに出かけた。そのついでに超願寺に押しかけた。椎野・蔭蔵主・田向参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。超願寺にいる用健が喜びだった。すぐに酒宴を準備して下さった。酒宴一献の間、和漢連句を懷紙一折り分おこなった。

花の春 色添ふ松の 緑かな

椎野

桃映夕陽紅

私の句

迎客林鶯囀

用健

懷紙一折り分詠み終わって、帰った。

#### 蔭蔵主、指月庵から退蔵庵へ移住する

二十六日、晴。蔭蔵主が退蔵庵へ移住した。退蔵庵主が頻りに招くので、指月庵をお出になったのである。

#### 大光明寺住職が後燈録について講義する

今日から大光明寺長老が後燈録について講義なさる。これは、蔭蔵主の発案によるものだ。用健も同じく聴講するそうだ。

ところで、大光明寺長老が寿蔵主を使者として申されることには、「塔頭大通院の建立を室町殿がご承認なさったので、早速造営を開始しました。そうしたら、長老の手際がよろしいと室町殿のお褒めに預かりました。それにまた来月には室町殿が大光明寺へお入りになると仰りました。それで、このご来寺以前に急いで大通院を完工しなければいけません。寺家として微力を尽くしますが、宮家からもご助成いただければ幸いです」とのことだった。

この前の立柱の時、皆に寄付するように命令した。今回も重ねて寄

付の命令を出しましょうと長老に返事しておいた。

聞くところによると、室町殿は今日、石清水八幡宮参詣に出かけたそうだ。明日の社参は、晴れ晴れしい儀式になるそうだ。

さて三月もう終わるので、和歌の短冊を皆に配った。

#### 田向経良、参議を辞退する

二十七日、晴。地方官の任命式、最後の夜である。昨夜が最終であったが、今夜に延期となったそうだ。田向経良卿が参議を辞退した。

二十八日、雨が降った。毎月恒例の連歌会、即成院善基と小川禅啓の二人が今月の幹事として、いつものように準備してくれた。椎野・田向経良前参議ら、いつもの面々が連歌会に参加した。

二十九日、晴。三月も最終日、名残が少なからずある。先日出題した和歌、私・椎野・用健（漢詩）・蔭蔵主（漢詩）・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・正永・稚児の洪得（漢詩）らが詠った。しかし和歌の出来映えが少々悪かったので、短冊を取り重ねるのはやめた。

孟夏（四月）朔日、空は晴れ渡り、風は静かだ。「めでたい慶び事は一つではなく、お祝い事は数多い。とても幸せだ」と予祝した。

朝早く、昨日の和歌を披露した。田向前参議・重有朝臣・長資朝臣が和歌を詠いあげた。その後、一献の酒宴をした。いつものように月始めのお祝いをした。酒宴が終わって、椎野は浄金剛院へ帰っていった。

用健・松崖（これは蔭蔵主の道号だ）・稚児の洪得が来た。それでまた酒を飲んだ。

#### 京の傾城二三人が宮家御所に乱入する

二日、晴。いつものように風呂に入った。今日、美女が二三人、御所の中に乱入してきた。そして常の御所などを見て回った。見苦しい場所であり、見られて恥ずかしい限りだ。女性たちの姿に変わったところはない。京の一条高倉あたりに住んでいると言っていた。もしかしたら、上皇御所の侍女かもしれない。彼女たちを宮家御所に招いたの

は宮家の内情を知っている人なのかもしれない(※)。不審なことだ。  
**足利義持御所で怪異がおこる**

さて伝え聞くことには、室町殿の御所で怪異があったそうだ。寝殿の建物がつむじ風に吹き破られたという。代々大事にしてきた小袖という銘のある鎧が置いてある部屋一間も、吹き破られた。屋根のひわだ桧皮も散々に吹き飛ばされた。

あまりのことに室町殿も驚かれたそうだ。それでこのところ、北野天満宮へお籠もりになり、秘蔵の名馬も神馬として寄付なさったそうだ。その他にも御祈祷をなさったという。

これ以外にもいろんなところで怪異が起こっている。これから何が起ころのだろうか。

※「彼女たちを宮家御所に招いたのは宮家の内情を知っている人なのかもしれない」…原文には「御所に招くこと、存知の人なり」とある。  
五日、晴。遊山に出かけた。ツツジが花盛りである。それをちよつと見てから、帰った。妻の二条殿が宇治の今伊勢神明社に参詣しに出かけた。

### 庭田家の遅桜

さて庭田家の遅桜が盛りである。どうぞご覧下さいとの招きがあったので、大きな酒甕である酒海を携えて庭田家へ行った。私の長男・娘・東御方・廊御方・上臈・二条殿・今参・田向前参議・長資朝臣・阿古丸らを連れて行った。

庭田家では酒や肴をいろいろと用意しており、恐縮した。一献の酒宴の間、和歌を詠んだ。また双六の総当たり戦(※)もした。とても酔った。五献を終えて、宮家へ帰った。

毎年遅桜の時分、庭田家へ花見を申し入れるのが佳い先例となっている。めでたいことだ。

※「総当たり戦」…原文では「廻し打ち」とある。

六日、雨が降った。後伏見上皇の祥月命日なので、法事讃をした。この法事の当番は稚野寺主である。綾小路信俊前参議を、いつものようにこの法事の事務担当者とした。

雨の中、暇だったので、双六の勝ち抜き戦(※)をした。田向前参議らが参加した。その勝負の後、すぐに負け態で酒を飲んだ。

※「勝ち抜き戦」…原文では「打ち勝ち」とある。

八日、晴。今日は仏生会であるが、大光明寺へ行かなかった。それでお寺から花堂が送られてきた。焼香して誕生仏に甘茶を注ぎ、お寺へ返した。

### 青海波垣代について記された琵琶の書

今出川家の陽明禅尼から青海波垣代かいしろについて記された琵琶の書一卷と笏しやく一本が進上されてきた。この琵琶の書一卷は、故今出川公行前左大臣が借りていた本なので、宮家に取り戻したのである。笏はなんとなく欲しいと私が申し出たものである。

九日、晴。廊御方のお部屋へ行った。これは、年始の宴会がこれまで延期されていたからである。宮家の男女全員が集まって、一献が何度も廻つてきて、酒盛りとなった。その後、禅啓がお代わりの酒を用意してきた。とても酔つ払ってしまったので、座を立った。ただひたすら新年をお祝いしたのである。

### 御所見学の女性たち・尼僧・稚児たちが大勢乱入する

ところで、今日も御所を見に来た女性たち・尼僧・稚児たちが、大勢乱入してきた。そして常の御所へ無理やり入り込んできた。追い出したけれども、言うことを聞かず、しばらくの間、見廻っていた。よくないことだ。彼女たちの服装は普通である。もしかしたら公家の関係者であろうか。

十日、晴。いつものように風呂に入った。

## 京都市内に夜な夜な物騒な噂が流れる

聞くところによると、このところ、京都市内では夜な夜な物騒な噂が流れているようだ。その実否は分からないが、いろいろなところで怪異があるらしい。なにごとが起こるのだろうか。

室町殿は清水寺へお籠もりになっているという。天皇陛下は内臓疾患のご病気だとか。ただし少し回復してきたそうだ。上皇御所ではこのところ、平家語りに没頭しているらしい。琵琶法師の専一や相一が平家を語っているという。

十二日、晴。双六の総当たり戦(※)をした。宮家の女性たちや田向前参議らが参加した。その後、負け態で酒を飲んだ。

※「総当たり戦」：原文では「廻し打ち」とある。

## 北の小壺庭に野筋を築いて秋草を植える

十四日、晴。宮家北側の小壺に緩やかな起伏を築いて秋の草を植えた。

蔭蔵主松崖がいらっしゃったので、一緒にツツジ狩りに出かけた。

重有・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主も連れて行った。まず退蔵庵では、松崖がお住みになっている御寮へ行った。その後、指月庵へ行った。酒樽一つを持参して、秘かに酒を飲んだ。松崖もまたお代わりの酒を用意した。数杯の酒宴となった。稚児の洪得・本玖も出てきて、酒宴に加わった。

その後、二人の稚児も連れて宮家へ帰った。洪得はそのまま宮家に留まったが、もう一人の本玖は寺へ帰った。夜にまた酒を飲んだ。私は前後不覚になるほど、酔ってしまった。よろしくない事である。

【頭書】(Ⅱ日記の上方の隙間に書き加えた記事) 兄の後家である上臈局が実家に帰った。珍しく京へ戻るとは、何かあったのだろうか。

十五日、晴。二条殿が惣得庵に行った。その後、芝殿を連れて帰ってきた。芝殿は御酒を持参して来た。一緒に酒を飲み、面白かった。

十六日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。壺越調の回盃楽・鳥

急・颯踏入破・賀殿急・北庭楽・胡飲酒破・陵王破を演奏した。長資朝臣が太鼓を打った。

夜に即成院へ行った。いつものように、念仏の法会に参列した。

十九日、晴。重有朝臣が清水寺にお籠もりするという。稚野も一緒にお籠もりすることになったそうだ。それで二人一緒にお籠もりしに出かけた。

上臈が戻ってきた。上臈のお土産で酒を飲んだ。

## 庭田重有、清水寺に籠もる

二十日、晴。いつものように身を浄めた。重有朝臣が清水寺にお籠もりしている。ところがお籠もりしたのは、重有ただ一人だそうだ。稚野は堅く約束したのに、来られなかったという。どうして嘘を言ったのだろうか。

二十二日、晴。用健がいらっしゃったが、すぐに帰っていった。蔭蔵主

松崖がまた来られた。

ところで宮家の女性たちが田向家に行き、戻ってきた。東御方が酔っ払っていたので、一献の酒宴を宮家でもすることになった。北向きの庭をこの前、掃除して秋草を植えた。この庭は、東御方の部屋の前にあたる。それで東御方の部屋から北向きの庭を見るために酒宴をしようということになったのだ。謡も歌われ(※)、面白かった。松崖もまたお代わりのお酒を持って来たので、数献の酒宴となった。女性たちが深酔いしてしまった。よろしくないことだ。

## 清水寺に和歌を奉納する

重有朝臣が清水寺から和歌を詠み、それを送ってきた。私から返歌を送り返した。それ以外にもう一首、私の和歌を清水寺に奉納させた。

※「謡も歌われ」：原文では「一声に及び」とある。

二十三日、晴。今日は賀茂祭である。典侍役の広橋兼宣大納言の娘が急に短期間の喪中となったので、代わりに日野西盛光卿の娘が賀茂杜へ

渡ったそうさだ。

### 相応院主弘助親王の寄付金は門跡としてあまりにも少額

さて相応院主弘助親王から御馬の代銭二十貫文を頂いた。これは塔頭大通院の建設資金として御寄付下さったのである。この金をすぐに大光明寺へ渡した。ただ門跡の寄付金としては、余りに少額ではないか。どうしたことだろうか。

二十五日、雨が降った。重有朝臣が清水寺から戻ってきた。彼が語るところには、このところ清水寺では毎日三百五十人の僧が法華経を讀経しているそうさだ。これは、来たる二十九日に御堂の上棟式をするためだという。これで、去る貞和年中（一三四五―五〇）に焼失して以来続けられてきた造営事業が完成する。しかし今まで上棟式が行われてこなかったもので、挙行することになったそうさだ。これで来たる秋には竣工して、御堂の完成供養式が行われるだろうとのことだった。

二十六日、晴。御香宮へ行った。さて稚児の聖乗が近々出家するそうさだ。それで名残を惜しんで、祝宴を開催した。蔭蔵主松崖・具侍者・重有・長資朝臣らが参加した。

二十七日、晴。大光明寺へ行った。長老の講義を聞いた。その後、長老と会って話をした。塔頭大通院にも行ってみた。建築はだいたい完了していた。きれいな建物だった。

用健・松崖・具侍者と一緒に寺を後にした。そして退蔵庵へ行き、庭の池辺りを見て回った。次に松林庵に行った。座敷飾りがとてもきれいだっさ。松林庵主と玄超が出てきて、一献の酒宴を用意してくれた。丁寧にお膳を整えてくれた。三献飲み終わってから、帰った。

### 称光天皇病氣平癒祈願の御修法

二十九日、晴。朝廷では二十五日からご祈禱が行われているそうさだ。導師は山岡崎僧正恒教だという。今夜、灯火を持つ役をするため、長資朝臣が出仕しに行った。天皇陛下のご病氣はたいして重いものではな

いようさだ。ただ内臓の不調からご不快でいらっしやるといふ。

聞くとところによると、室町殿の叔母である嵯峨法境院が亡くなっさそうさだ。大光明寺住職が火葬の役をお勤めになっさという。

### 稚児の聖乗が出家した

稚児の聖乗は今日、出家したそうさだ。

三十日、小雨が時々降った。長資朝臣が帰ってきた。朝廷のご祈禱は尊勝法だという。昨夜の灯火を持つ殿上人は六人だったそうさだ。

花山院持忠中将が昇任お礼の拝賀をしたという。

（続）